

## 「女子校について考える」

2025・10・8 重枝 一郎

私は、本校に赴任した時から、福岡女学院の創設者の思いを受け止めながらも、未来に責任をもった教育実践をしていかななくてはならないと考えている。

ただ、今の社会の現状を大きな視点で言うと、日本のジェンダーギャップが世界で118位となっていること、また、少子化などの数値的な課題での共学化の波が激しいことなどがある。両方とも言ってみればネガティブな情報である。このような社会的背景の中で、私たちミッションティーチャーは「女子」について考えていかななくてはならない。

まずは、「今の生徒たちが、女子の新しい生き方を見つける機会を本校で十分得ているか？」ということをお問わなくてはならない。

私は女子校の校長となった時点で、女子校の存在意義を語る責任があると思った。女子だけを集め、その発達段階に合わせた教育をする。それはなぜか。そのことにエネルギーを集中するのはなぜか。私たちはその意識を持たなくてはならない。

私は、校長研修だより121「女子校について」において、そのことを書いた。一部抜粋すると「ジェンダー・バイアスのかからない自由で穏やかな雰囲気の中で、自分に素直な認識方法や興味関心が肯定的に捉えられ育成されていくことは、女性特有の能力だけでなく、男女が共有している能力も十分開花させ自己確立を促す。それが女子校の教育環境の好ましさだと考える」と書いている。

今も、「女子」の成長を促すためにはどういう考えをもっておくべきだろうかと自問自答する。また、発達段階的に大学年代より中高年代の方がそれは重要だと思っている。

さて、「女子」の学びをデザインする際に大切なのは、やはりゴールデンサークル理論の「何のために(WHY)」である。そこで、先日、守山院長と学校長で、「何のために女子校」というテーマで座談会を行った。その際、守山院長が参考資料としていくつかの話を紹介してくれた。このように今、私たちと同じようなことを考えている人たちはいる。その人たちは、まず「〇〇な環境」という表現で示していた。

「女子の教育に必要なものをとことん追求した学びの環境」

「女子が心理的に安心・安全を得やすい環境」

「女子が率先してリーダーシップをとらなくてはならない環境」

「無意識に身に付けがちな性役割にとらわれない環境」

「多様性・公平性・包括性を醸成する環境」

これらのことは、雰囲気的な要因になり、今現在、女学院の私たちは共有し、発信できていると思っている。次に、上に示したような要因を継続・刷新していく中で、学校文化となっていかななくてはならないことを示していた。

「キャリアプランに結びつくロールモデルの存在」

「女性の観点・視点での冷静な社会批判」

「男性中心社会に対する対立的な価値の提供」

「ジェンダーギャップの大きい日本社会を長いスパンで考え、変革する力」

「在学生や卒業生からの高い評価」

「女子校ならではの成長」

これらのことは、本校の建学の理念にもつながっていくと思う。そして日常の私たちミッションティーチャーの教育実践の拠り所になる。